

第八「ミシタチオ」海外戦

一 作戦準備 前進基地ノ設定

● 前進基地ノ設定

(1) 昭和十九年九月十二日第一回大空襲以来「セ」方面魚雷艇
基地「D」に於てハ椰子林内ニ魚雷艇ヲ引揚ゲテ隠匿被
害極少ノ限ニ努メタルニ連日ノ空襲ニヨリ被害多ク到底

修復ノ格ニ減少ノ一途ヲ辿ルニ至リ

● 復元ノ格ニ減少ノ一途ヲ辿ルニ至リ

(2) 尚中飛地区ニ對シテ輸送ハ舟艇機動ニ移行ノ止メテテ狀態ニ

アリ依テ

● 尚中飛地区ニ對シテ輸送ハ舟艇機動ニ移行ノ止メテテ狀態ニ

ヲ行ヒテ

● 尚中飛地区ニ對シテ輸送ハ舟艇機動ニ移行ノ止メテテ狀態ニ

(3) 十月下旬敵舟艇ヲモノミシテオシ海ニ出没ノ兆アル旨陸軍報ニ接ス

(4) 依テ敵ガヒカヤ海ミンダオ海ニ侵入スルコトアルハナリニ
予モ思シ不取敵ノセゾ山島南北西端ニ魚雷艇ヲ進出シ
獲テハ敵其基地ヲ連綴基地方ヲ決定スルコトトシ係セテ
近ク配屬セラルヤキ特殊潜航艇用前進基地ニモ艦用
スベク予モ思計画ヲ定メ魚雷艇隊ソニテ調査セシメタリ

(5) 然レモ計画ニ對シGIF戦術部參謀ノ意ハシラ漏聞ナク生々
不快ニ感ズ私情ニ在ラセラルハ不可トハ思ヒラシム 北部ハ
調査スルニ止メ南部ニ其ノ対出所ヲ名付ロシムルコトヲ
ゲテニ陸軍司令部ヲ派シ偵察援助ヲ受ケテ設置セリ
魚雷艇隊ノ短移動ヲモ監視一ツ電

101

(12) ミンダナオ海軍

別冊「特殊潜航艇ノ作戦」ニ詳述ス

魚雷艇基地ヲ引揚ゲ

(10) 魚雷艇ハ遂ニ作戦ニ使用シテ其情状トナリ之ヲ取止メ

特殊潜航艇自備ノミヲ十一月三十一日迄進出セシメ

(11) 注

セブ島北岸ニ基地ノ準備ヲナシテ之ヲシテ後ニ陸上作戦ニ移ラシ場合第一師団駐紮ニ對シテ通信連絡上極メテ有効ナリシナリト我々認メナシ

第九ノセブ島ノ戦闘

一 聯合艦隊ノ状況

(1) コイノ戦況前

(1) 如ノ島ニ米軍中佐ト稱シ鎮山技師(氏名失念)ヲ一ツ占領後
米軍比軍ヲ指揮シ山中ニ在リ

(2) 聯合艦隊司令長官古賀中將搭乗ノ輸送機不時有
ノ際ニ右米比軍一之ヲ被殺シ其後日本軍駐屯

地以外外ハ其ノ勢力下ニ在リテ暴走ヲ容許セザリ
中ノ一ニ送シラシワナリ

(3) 昭和二十年九月以降コイノ島附近ニテ遭難セル艦船ノ
乗員ハ皆必ズ米比軍ノ被殺シタル者ナリ

(4) コイノ島ニ在リテ在ルニ於テハ安全ナルニ
放火事件アリ或ハ屋内ニ秘密無線機ヲ掘付

(6) 昭和十九年十一月以降、コグレ市を以て山方面陣地構築ノ為、我軍一團
入ルトテ、敵軍ハ奮勇ニ最古山峯天山以西ニ退ル後退ス

ケル跡ヲ見ルコトアリ

(5) コグレ飛行場を以て表山ニ米比軍アリテ掃テ射撃ヲ受ケル

コトアルヲ以テ昭和十九年八月廿日隊司令部より出前アリ

コト台湾巡査隊ヲ激盛ニ配備整え戒中ナリ

(4) コグレ市コグレ川間ニ在テ米比軍ノ襲撃ヲ豫

期セシメ可クナル情況ニアリ

(3) 昭和十九年八月以降、米比軍より陸路密裡ニ兵隊彈藥ヲ移

陸路密裡ニ移シタルモノノ如ク、裝備次第ニ改修セラル

(2) 陸軍ニ在テハ、随時討伐ヲ實施セラルモ、効果不見クニナリ

ニ、コグレ市戦以後

(1) 匪情ハ次第ニ悪化シ、一途ヲ辿ル

(2) コグレ市南端附近ニ、敵及リコグレ市北方ハ特ニ匪情悪化

敵軍ニ在テハ、コグレ市ノ如ク、ソコトコグレ市ノ附近ニハ敵軍

復員

FD90
104

機上通ジツアリトノ情^報頻頻解来ナリ

(3) フエグ島の南端附近ニ於テ昭和二十一年一月下旬頃特殊潜航機

機(長浜田特中尉)ハ傳書者ノ銃頭小型汽船ニ隻ノ陸泊シ

アルヲ認メ之ヲ攻撃セシム事ニ決アリ其後米兵軍ノ偵察機ハ改定

(4) フエグ島特別長甘菜(比島人)ノ兄ハ以前ヨリ投函シアリ市夜

敵~~機~~通ジツアリトノ投書情報頻頻来リ

敵~~機~~攻陸部隊ヲモテ来攻ノ傳ハ敵~~機~~通情報トシテ再々アリ

米機和ヲテ年々モルモルモリ日ノ傳モモリ遂ニ真実トシテ

敵~~機~~同日朝敵機救来リ

(6) 陸軍ニ於テハ訓練第一主義ニテ陣地構築ハ軽便アリ

専ラ討伐ニ主カテ注カタルニ戦果ハ微々ナリ

(6) 昭和二十一年一月下旬三月上旬頃敵機天山陸軍守備隊ヲ

襲撃シテテケヲ奪取スレタセ。約三日間再ビ之ヲ奪回セリ

(7) フエグ島ノ是向ノ敵機海軍ニ敵意高被ラザルニ出波ストノ報アリ

敵の攻めに来攻後

物

(8) 敵未攻近づくに後と敵匪の流況化より島民の之を授かる者
(9) 敵攻略部隊のせがし来攻期日同国にハ敵匪情報トシテ昭和
二十一年二月に及ビ再三海流布せうせり 經て其昭和二十
一年三月二十七日未攻ノ匪情報ハ約半月以前より流布
せし事也。家ニ事トナリテ現ハレタリ

横ニ

次第ニ増加スルニ至ル

(1) 敵の攻めし来攻ト告之敵匪ハ直ぐ之を通じ敵上陸部隊ヲ誘
導する者アリ又天山西方ノ敵匪ハ沈没化シ度々攻撃シ来

(2) 天山部隊北方転進開始後ハ阻止攻撃隊を有アリ。或ハ協
力ヲ申出テテ陥穽ノ害ヲ防ヒシ者アリ

其ノ沈没部隊ヲ沈没スル者ハ自今方々千敵ヲ弄ス

二 戦闘準備

(1) 陸戦隊ノ編成ト陣地ノ構築

昭和十九年九月中旬敵KAB第一回中比地三大空襲後
不取敢在セザル海軍部隊ヲ以テ陸戦隊ヲ編成陣地

構築スルヲ以テトセリ

主旨ハ現任務履行ノ傍餘剰人員ヲ檢出シテ陣地ヲ
構築スルヲ以テ暫定的ノモノナリ 某大要報ノ如シ

陸戦隊編成大要

指揮官 三階基司令 吉村中佐

第一大隊長 十高富敏隊司令 丹羽少佐

中隊 他部隊ニ屬スルモノノ令部

第二大隊長 二宮飛行長 中島少佐

中隊 坂室隊 魚雷調整班 坂室殿

神給隊長 三三軍部 支部長 榊原主少佐

部隊 海軍部 海軍園係在島部人

施設工外隊長 施設部 支部長 佐滿技大尉

部隊 施設部 系部 波長隊 機雷隊

担当 参謀 林大尉

(2) 右編隊ノ下ニ不取敢海軍担当地域(日ノ丸山地区)ノ

最前線ノ艦隊裏山陣地構築ニ着手セリ

艦隊防衛隊(高南砲)ノ除キハ現任防衛隊員ノ松

出不能為地部隊ニ構メテ陣中ニ在リ

中ニ在リ 地帯ノ撤去致シ時程ニ至ル艦隊ノ最前線に敢闘ノ要アリ

部ノ撤去致シ時程ニ至ル艦隊ノ最前線に敢闘ノ要アリ

第一線 第二大隊 第三線 第一大隊 附屬隊ハ主陣地

復 員 省

8708

表を以て是に配備したるに之を不敵第一線陣地

ヲ全ク以テ着手セリ

然に航空隊防空隊(高角砲隊ヲ添う)ハ現任勢力ノ為

人々ノ檢出不能ト爲僅ク他隊ヨリ檢出し得ル共

力ヲ以テ之能率ト上ラズ今更ニ海空トシテ進マサル情

況ニアリ

土井下又ハ土井中

(3)昭和十九年~~十月~~月~~廿~~日頃敵攻略部隊ヲシキモノカモラス

海空南方ヲ西進中トノ航空隊通報アリ之爲海陸軍共

進ミ陸兵陣地ニ就カシメタリ

突進ノ事ヲハアリ陣地殆んど未有キと述ク僅ク海軍

第一線陣地ノ一部ニ三割程及出弟云ルノミナリシテ

以テ自隊ノ陣地區域ヲ知ル者第一大隊及陸軍ニ於テ

復員書

戦時中 海軍省 海軍省 海軍省

殊ニ多ク濃私其極達シ

聖子に於て情報が地味に符字ノ取違ヒナリ

シテ以テ直々配備ヲ解キ

陣地構築第六特ノ固心ヲ深カラシメタリ

当司令部ニ於テハ各隊ヲ激勵シテ陣地ノ構築ヲ促

進セシメタリ 尚タリサイハ沖ニ深遠度校書ヲ設

上陸ニ備フ

(4) 十二月中旬「ミシダケ」号北洋行「マセ」号ニ敵大艦団

アリト「バコロド」陸軍校報ヨリ用ニ陸軍陣地ニ就

可動魚雷艇ニ隻ヲ用ニテ

哨戒ヲ行ハシム

今日ハ前日ノ若ク経

...

翌日敵ハ「スル」海方面ニ移動スルヲ判断シタルヲ以テ
 陣地ヲ撤シタルニ敵ノ未攻命ヲ近キヲ思ハシメタルニヨリ
 現任勢ニ必要最モ限ノ人員ヲ除キ兵力多ク敵共カ
 ヲ陣地構築スルニ急ムシ且各隊自分ノ陣地ニ當リシ
 陣地ノ位置ニ合部陣地内ニ移リ
 斯クテ陣地ノ構築ハ有クトモ進歩スルニ至レリ
 而シテ四月迄隊ノ自進漸クソクニ至ル
 由合議ト司合部ト於テ數回用催シ編成ヲ改変スル最
 後ニ是ノ表ニ到達セリ

陸軍隊編成表

陸軍隊指揮官

陸軍特務司令官 原田少将

幕僚

陸軍特務幕僚

吉村少隊

少隊長

吉村大佐

(三階基)

111

16) 海軍陣地有之進海。飛行場防空中、千五枚板銃、
 外全部陣地に設置完了。飛行場防空用、千五枚
 銃、千五枚飛行場、使用減少、千五枚大部分之ヲ

- 部隊 第一大隊 (第廿九隊長 三階基九若少佐)
- 根来部隊 部隊長 根来大佐 (中隊空)
- 部隊 第二大隊 (長 中隊空原口少佐)
- 神給部隊 長 柳原主中佐 (軍需部)
- 部隊 軍需部 同僚
- 施設工外隊 長 林少佐 (三特根倉隊)
- 部隊 施設工外隊 設置隊、航空廠
- 豫備隊 長 大床中尉 (一〇〇防空隊)
- 部隊 百防隊 水電、見張隊

日ノ丸山降地ニ收備シ「セ」飛行場ノモノハ半袋ト
 同飛行場ノ至要性トニ鑑ミ最優ト致シタルニ
 豫ノ降地ヲ設備シ敵上陸ト万部ヲ降地ニ取備シ
 付タリ（一即ハ陸軍降地防空ニスル也）

(7) 日ノ丸山主降地ノ更ニ要塞化シ其一部ニ
 シ支村部隊中部ノ根柢ヲ移シテ
 第一線ノ第一線ノ配備ヲ変更シテ各三射形トナシ
 〇ノ計五ナリシモ遂ニ其ノ中途ニ在リ敵未だ取トナレリ

⑧ 海軍降地ノ南北西側ハ陸軍ノ最精銳大西部隊ノ担
 当ナリシモ陸軍ハ人少ク担當地域過大トノ理由ニテ
 北側ヲ割當テ来リ。海軍担当セザル降陸軍ハ配

海軍

復員省

備レ付ト稱スニ附己ハリ付トシテ之ヲ担出カセリ

其ハ陸軍ノ構築ヲ了シテアリトシテトナリシモ、海軍
トシテ完成スル迄陸軍ノ一部ヲ是ノ線ニ留ルベシトシ

ルニトシテ約束シタリ

此ハ陸軍ノ兎角ノ理由ヲツケケドトシテ引揚ヲ強行シ

陸軍ノ僅カニ教歩隊トシテ一ヤ隊ノモトアリトシ

海軍ニ於テハ水上機隊ヲ根拠部隊ヲ支村部隊ニ派

遣魚雷艇隊司令境田ヲ佐指撥ノトニ陸地構築ホシ

使進軍漸進行ヤ力ヲセズニ本陣地ニ概不

完成前線津地ニ留シト着キセルニテ敵ヲ迎フル事

トナリタリ

(1) 陸軍ノ備物所ノ軍屬ヲ以テ益子部隊ヲ編成シ(長益子技術

復員令

大尉)之ヲ海軍ノ指揮下ニシテ海軍陸地北方全部

ノ大区域ノ相當ヲ押付ケ来ル

司令官ハハ陸軍ニ於テハ先鋒後任ヲ肉ハシ陸軍之ヲ

指揮スルヲ建前トシテアリ海軍ニ於テ陸軍ヲ指揮

スハ不可レトノ理由ヲ以テ断平之ヲハカク

エタリ

(11) ~~陸~~主義トシテ海軍ハ陸地第一主義ニテ之ヲ強レド要者化日ル

ストトヤリ 即陸地ハ土厚ニ米ヲ目標トシ陸地ニ固

ハ標孔ヲ以テ連続ヤリ 外島方針ハ急ヤリ

訓練多陸軍ニ情シカニ若シク少キ者概本軍非重要

防衛ホトシ 津地出来上リテ訓練ヲ行フストトヤリ

復員省

115

(10) 沙有古卷、概要

十四程有古角記 三門

(三門指孔裝備完了)

二十五枚鏡

單裝約二五

(全部指孔裝備 三枚送原簿)

解裝約一。(全部指孔裝備)

七、七枚校鏡輕校約一。

小鏡十五名 = 一枚位

自新夜詠 = 詠(老古門)

(12) 陸軍に於てハ訓練第一主義ニテ計成ニ專念 陣地ハ

便宜に對古壕或ハ地雷トシ 大塚中野 旅團師團

司令部之 簡單十九指孔式トス 陣地ノ配

備又手原ノ書ヲ十セリ

復員省

9990 0690
116



口 1師団司令部
 F 海軍司令部 旅団司令部
 β 大隊本部
 — 道路

14990

(四) 兵器ノ利用考案

(1) フロート島ニ於テハ海軍ニ於テハ敵ノ進攻意外ニ早ク奇隊ノ進出
間ニ合ハズリシヲ以テ兵器ヲキミトテ進出部隊ハ途中棄
難無一物トテ出リ付ク有様ニシテ兵器ノ窮乏ノ極ニ
アリ

(2) 陸軍ニ於テモ小銃ノ外強ニト皆無ク近シ

(3) 斯ルガ故ニテ島防衛ニ當リテハ兵器ノ利用考案ニヨルノ
外途ナシ

(4) 根據地隊ニ於テハ施設セシモノハ爆雷ノ地雷利用ナリ。本件ハ
通信考課之ヲ担当當寬地並融氷ノ両種ヲ考案セリ

(5) 中米空司令根末大佐ハ航空廠ヲ指導シ機務部夜夜
品ヨリピストンヲ取外シマシムルヲ輕用シテフロート
砲ヲ考案強ニト會定隊ノ城ニ達シタルモ遂ニ其用ノ城ニ

復
員
省

達セドシテ了リ

(6) 陸軍不用砲彈多數アリ 根来方他ハ之ガ利用ヲ計ル
敏室隊門附近ノ砲孔ニ檢納セルニ違ニ利用ノ域ニ至

ス

(7) 三六號原山隊備付ノ擲彈筒ヲ其景ニ相當ノ世
流ヲ見ラシメ 最後ノ攻陷ニ至ルヲツヅキ 其用ノ域ニ
至ラズレテ了リ

(註)

小銃

海軍ハ戦斗欠ノ 1/15 陸軍ガ分割ヲ定ムルニ

陸軍ハ流戦斗欠ニ至ル迄總欠ナリ

板銃

海軍ハ25%板銃多數アリ

陸軍ハ板銃ヲ少ク持軍用令却ニ多數(船舶用ヲ含ム)

海軍ハ板銃二十九枚ヲ分割ス

復員省

送ニ受領シ付スレテ撤去

(1) 陸軍移行準備

(1) 昭和十九年九月十二日中華各地に大空襲以來一般の上陸外

出ヲ禁止シシ慰安隊ヲ閉鎖ス

慰安隊ハ之ヲ軍需部支那ニ移收案 雜紋ニ從事セシム

(2) 以上ノ戰進状況ト吾ノ物糧補給ノ途ヲ杜絶シ海陸軍

共其ノ關係年々ノ情況ヲ呈シ比島人又隱匿スニ至

ル

(3) 海軍ニ於テハ軍需部主体トナリ陸地内表ニ於テ農園

ヲ作リ栽培スルト共ニ海陸軍陸地外ニ於テハ陸軍ト

協定耕作ニ從事ス

各隊ニ於テ陸地内ニ掘り農園ヲ作リ栽培ス

(4) 戦時ハ軍需部ニ於テ陸軍移轉ニ陸地内掘りニ格

納ス 其他別倉物調子亦然リ

復 頁 卷

(5) 別二軍常部を伴トナリ物糧並に買隊ヲ編成セリ近
 效ニ於テ物糧ノ強制買付ヲ行フ
 (6) 前述ノ如ク各隊ハ水陸隊防空隊、特殊機潜艇隊
 隊外、外航空隊員ノ已マテ得ル者等ヲ除キ、陸地ニ
 於テ機ヲ移シ陸地ノ強化ニ努メタリ

(参考)

出陣中ハ二派ヲ生ズ即ニ能ク進軍ニ協力スルニ厭戦、
 有脱走スルモノ或ハ更ニ走ラズ敵ニ投ルモノトナリ、後者ハ物ヲ少敷
 ナリシモ大部ハ其水ヲ情リ帰還シテ隊長ニ謝罪セリ、又遂ニ降リ
 ガリシ者モ終戦後隊長ノ許ヲ訪レ謝罪アリ、前者ハ終戦後モ
 将軍日本ニ帰ルベシト主張スル者多ク、中ニハ、配給物資ヲ隊長ニ
 貢グ者モアリタリ、一般陸軍ノ如ク反動的ノモノヲ見ズ

復
 省

三、敵来攻前ノ情况

(1) 昭和十九年九月十一日第一回中津地区大空襲被害後ハ今ノ制空

権ハ敵手ニ譲チタリ

(2) コイツノ戦初期ニ在テハ未ダ特攻隊ノ進出ニヨリ稍一縷ノ望

アリタシモ、敗戦ノ兆明カトシニ後ヒ、特攻隊ノ活躍モ亦憫シ

ノ一途ヲ辿リ、稀々ニ三枚ノ戦闘機進出スルモ、敵機

ノ好餌トナル

(3) 之ニ及レ敵機ハ終自儘々トシテ、セブ上空ヲ制シ、我自前年

夏ヲ及見ル迄之ヲ攻撃シ、群隊ヲ生セシ、之敵飛行機

群ヲテ眼前ニテ収容シ去ルニテ、委々ナリ、我軍ハ此拒

敵出流ヲ各々々々

(4) コイツノ戦終末ヨリ敵魚雷機ノカモラス、悔ヲ求ホリ此水雷

ビヤカシ悔ニ於ケル傍若無人ノ振舞自ト共ニ、自烈シ

復
員
告

或ハソゴツド附近ニ泊敵艦ト連絡シ或ハソゴツド沖
 カリサイ沖ヲ遊弋シ。飛ヲ降実物ヲ投シ。時ニ陸
 上陣地ヲ砲撃ス。我ニ反撃ノ身見合ナリ。機
 飛行物表山ノ上ニ程高ヨリ砲ヲ以テ一二発見舞
 フト至モ。砲ニ照準器ナリ。数発ヲ放テバ敵機ノ好餌
 トナリ及ガシキルヲ以テ戦果ノ期待スベキモノ
 入ナリナシ

(5) 既和十九年一ニ於テハ書向 B24 ニ〇乃至三〇枚ノ編隊爆撃
 夜間単機爆撃ヲ連日各一回程度ナリシモ翌二十年
 ニナリテハ轟轟各二回程度トナリ戦闘機飛来亦強クド
 間断ナク書向ノ自衛隊ヲ定行ニ投後ニ困難ヲ増ス
 ニ至レリ

四 指揮権

海陸軍間ノ指揮権

(関係ト)

(1) 海陸軍間中央協定ニ於テ陸上戦闘ニ於テハ指揮権ハ先級任

ニ拘ラズ陸軍長官指揮権之ヲ執ルル旨規定セラレリ

(2) 當海司令官ハ三三特根進出當時ヲ鑑ミ喜デテ指揮ヲ受クル旨

言明シテレリ

(参考)

(3) 軍司令官ト當海司令官トノ關係ハ極メテ親密ニテテ蘇師團

司令官トノ間ニ師團長司令官及參謀長先任今謀互ニ深

知ノ向極ニシテ親密ナリ 前師團長行田守存ハ鑑ミ羨望シテレリ

武旅團長乃城日大佐(軍司令官及鈴木宗作中將ト同期)之人極

ヨリ同僚ナリ

(4) 昭和十九年十一月廿五軍司令官處レイテ進出ニ際シテハ

軍司令官ハ特ニ其間ノ關係ヲ内閣ナリトシテ有

海陸軍全般ノ指揮權ヲ當派司令官

ニ移ス旨命令ヲ出シ海陸軍中隊ニ對スル軍令

ヲ司令官ハ當派司令官ヲ經ルコトセラレタリ

(5) 當派司令官ハ該軍令ヲ及ムル都度成否ヲ表立シテ

松園長ヲ報告セラル電報ヲ午後波スル程ニ止メラレタリ

(6) 松園長亦陸上防衛ニ關シテハ協定通行表計畫ヲ樹ツルニ

其都度最高指揮官タル當派司令官ニ報告書ヲ同窓

ヲ求ムル様セラレタリ

中上ノ要所駐在軍備地帯ノ海軍例ヲ移メ用事及

計載以テ予隊ノ海軍ノ指揮下ニ入ルル向意起

テ前着ニシテハ時被既ニ達シテハ變解第一大隊ニ津地

隊ヲ命令カニ急ギトテ軍令部計畫ニ俾ル旨主張

シテトセラレタルニ少知ニ於テ全般ヲ察シ指揮

(7) 昭和二十一年一月第百二師團長は、陸軍少将長つせが、自
 戦傷治療中ナリシニ傷深ク、師團最高指揮官トシ
 テノ職務遂行不能ノ状ニテアラサレニ指揮ヲトラセズ
 (其後軍令多深ク言ニヨリ、陸軍少将ニシテ指揮権
 ヲ一時喪失セシメラル知ル)

(8) 一二頁記載陸軍担當隊地ヲ海軍側ニ移シ内題及一二三頁
 記載及子隊ヲ海軍ノ指揮トシタル間、起リヨリトナリテ前
 者ニ対シテハ、時後既ニ遂シ且今更ニ第三夜第一大隊^新陣地構
 築ヲ命令スルニ忍ビストレ^{海軍}司令官^{海軍}命令ニ及スル方
 法強セシタルニ程、事情ヲ察知シ海軍陣地ノ再引致ス
 ル外ナレトシ、其^{海軍}司令官^{海軍}ハ、深克漸ク其^{海軍}承諾ヲ
 得タリ

後者ニ対シテハ前記ノ通ノ理由ヨリ断リ旅团长ハ是等
 指揮官トシテ今般情況ヲ考メ察セシ及音響改メ之張セ
 ラレシニ違テ断リナリ 其間若干ノ感情的ノモノアリ
 ルモ前角ノ承諾ト小友ノ取持トナリ其後物言再ビ舊
 ノ妙ヲ能知セシナリ

陸軍三團

(9) 三月二十六日敵未攻我陸戦隊地ニツラト共ニ旅团长一ノ機日

少将軍曹ノ指揮トシテヨリシニ同ニテ旅团长ヨリ指揮ヲ執ル事ニ決シテ

(10) 同夜軍司令官及ハ一ノ指揮ヲ断ル事ニ決シテヨリシニ同ニテ旅团长ヨリ指揮ヲ執ル事ニ決シテ

當隊司令官及防衛 當隊司令官及ハ特ニ軍司令官及用ト
 シテヒールヲ軍考課長用トシテ酒ヲ飲シオカレタルヲ次
 テ之ヲ御食シ且殊々多ク賜ラシ 軍司令官ノ感謝又指
 シテ戦中協力ト共ニ

日夜令強中軍司令官ハミシダオ部隊指揮ノ為同局
ニシカシヲ以テ激ル名注サレタルヲ以テ當隊司令官ハ極力
其ノ無謀ヲ諫メシタリ

同夜半軍司令官ハ天山師團司令部ニテ行ハシ

(11)翌三ノ七夜軍司令官以下幕僚、師團長、旅團長

當隊司令部ニテ召集

軍司令官ハ軍務課長友近少将方敵多謀大當犯

大佐、師團長瀧中少将、旅團長乃坂少将

當隊司令官及第四少将先鋒多謀志柳大佐(小生)

ヲ幕僚室ニ召集シテ令ラ下露セシ

日敵軍中將ハ成々々長クセテ陣地ニ於テ機力御不

ニ維持シ付タルニ至ラバ北方ニ転進シ第一師團ニ命

同スベシ。爾後瀧中少将ハ成々々速カニテ不ダ

口ス島ニ渡リ同方面外敵ヲ指揮スルハ
高木伴ハ部下ニ對シ輕進ヲ命ジ攻密ヲ保持ス
ルヲ旨附加セラル

(12) 右命令下達後軍司令部ハ自部率トヨリ「ラボゴン
ニ向ケ出ス

(同標命令ヲ第一中隊ニ下達後セシメテ口ニ向テ舟般ヨリ南ト「ミ
ニ向ケ出ス

(10) 海軍ニ在リテ指揮権

(1) 同一地区ニ在リテ指揮系統ヲ異ニト難ク之ヲ執リ
ルニ範圍内ニ在リテ互ニ最高指揮者ヲ中心トシテ連絡ス
ルヲ通常ノトス

其性格トシテ
社ニ在リテ中隊司令部ニ根柢大ニ合テ協力的態度ヲ

示サズ其他海陸軍防部隊ニ対シテモ孤立獨立的ナリシテ
批發的ナリ 評判移ノ重シ

示サズ其他海陸軍防部隊ニ対シテモ孤立獨立的ナリシテ

之同前令ノ性格ヨリ出ワルベシ

ニ在テモ有在ナリト謂フ(軍務局長 榎村 進少佐 談)

亦海軍ノ司令官部ニ在テハ特根之ナリ

陸軍ハ便乗等認ヘテ中隊空トシテ連絡ヲ當隊司令

部ニ依頼シテモナク常トス

此ニ中隊空司令官ハ當隊ニ在テハ取次グ度ニ司令官

ト自分トハ同格トナシト公言シテ文ノヨリワケナレリ

陸軍ヨリ並月電送不通ノ有當隊司令官部ヨリ自ラ

ル特ニ在テモ亦起リ

トモナク陸軍ニ在テモ亦起リ

(2) 其他海軍各隊ハ特根司令官ヲ中心ニ能ク協力固

結セリ

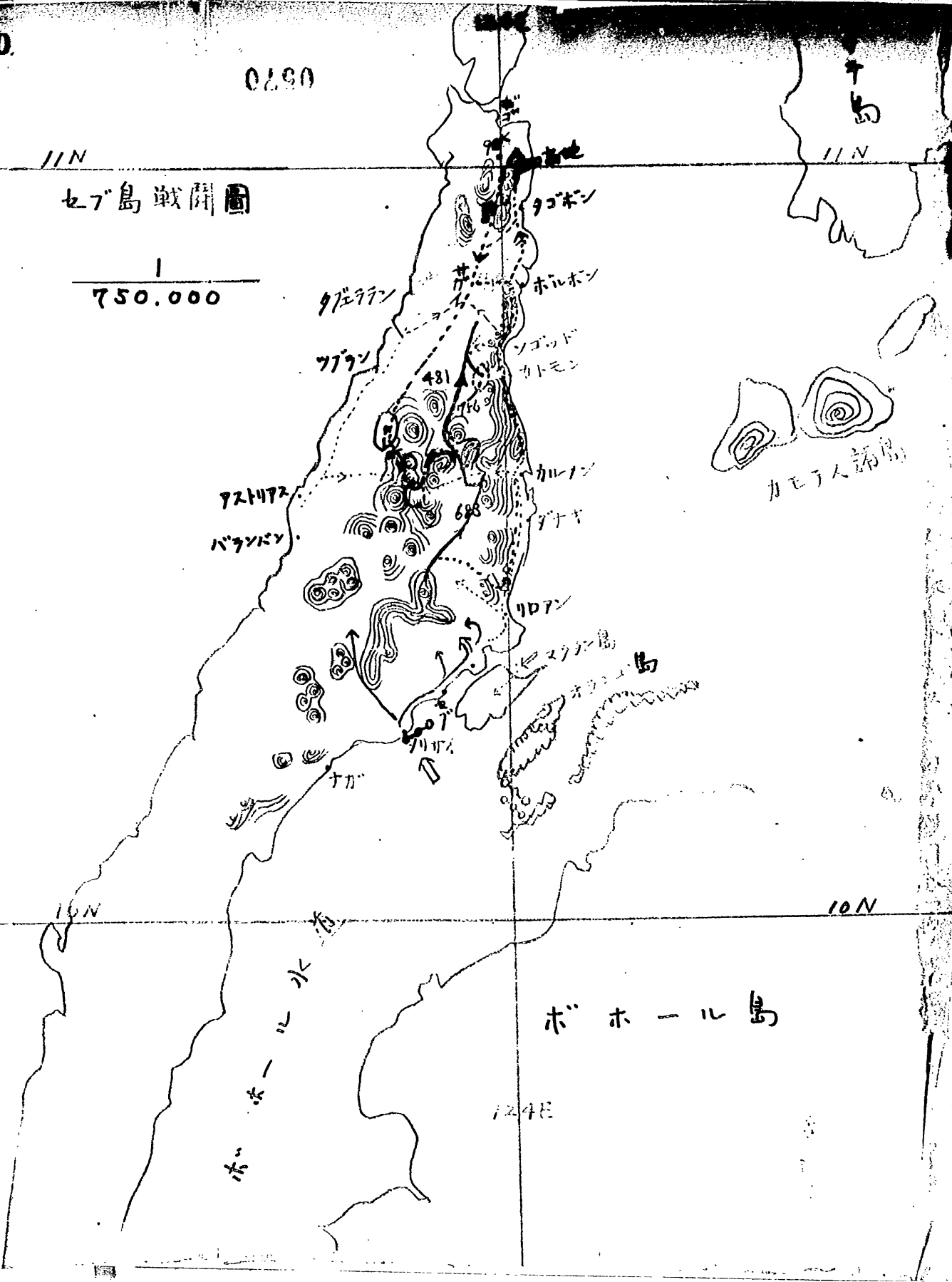
0704

0570

11N

セブ島戦闘圖

1
750.000



10N

10N

124E

五
敵未攻上陸
西蔵軍艦隊
(4)陸軍艦隊は移りし後、和親大佐を以て艦隊司令官に任じ、
事毎に之を擁護し、之を以て艦隊司令官に任じ、
艦隊司令官は、向て西蔵軍艦隊を擁護し、
艦隊司令官は、向て西蔵軍艦隊を擁護し、

(1)昭和二十年一月ニ入りテ敵ヲセブ未攻ノ流克度之流布セシメテ
ルハ前述ノ如シ

度々ノ事ニテ、精疲力乏ノ状態ニアリシハ勿論ナルモ、當隊司令官及
ニ於テハ次第ニ其ノ數、砲台名、艦ヲ奪取セラルルニ至リ
タリ

(2)三月二十六日早朝日ノ丸山見張リ、敵攻略部隊見エト
ノ報アリ、望見スニマクサシ島北側(航空隊前)ニ敵
新式大砲ヲ基礎付トシ、揚陸援部隊ヲ集メテ、
新式大砲、マクサシ島南側(タリサイ沖)ニ新式大砲
ヲ基礎付トシ、揚陸援部隊ノ支援ヲ受ケタル約ニテ
隻ノ輸送艇隊投錨シテ、前者ハ海軍降地ニ向テ、

列ヲ教キ「マラタニ北側ニ白ケ一部舟敵ヲ運行セントシ
後者ハ同じラ「タリサイ」ニ白ケ棉陸ノ準備ヲナシソハア
ルモノ如シ

(3) 海軍部隊ハ棉陸ヲ直ニ陸兵陣地ノ既備ニウケ

其他計画直ニ「タリサイ」ニ命ズ

(4) 事情変化ハ如シ各隊情況及如ク敵上陸開始當日各隊引揚ゲソリ

(A) 特殊情報艦ハ可部ノモノニ隻出舞他ハ棉陸附近自沈

七九号艦(市川大尉)「タリサイ」敵輸送艦攻撃ヲ實施セルモ

魚雷ハ射点法及敵ハ引退シ棉陸附近自沈

八四号艦(杉田七曹長)同右攻撃ノ為射点占位中敵魚雷

被中ノ爆雷攻撃ヲ受ケ、情報艦不能ニ陥リニ棉攻

隊断念、浮上シテ命令通過「マラタ」ニ自沈同地ニ沈テ

修理中神聖中敵内爆発ノ為隊断念ニ至ル

「ホルト」船ヲ取止ム

八一号船(谷川中尉)ハ予ニ于テ軍司令官及ツクガ事多ク「ボゴ」ニ
迎ヘ敵上陸者ヲ「ボゴ」見港北ロヨクテ後情況ヲ怪シミツ、
入港材積ニ於テ始メテ敵上陸ヲ知り、機自身ニ於テ
自沈

B. 水陸軍隊

松高九州ヲ榑橋附近ニ敷設引揚グル隊定ノ是處司
令官ノ没害ニ拘ラズ信長ヲ午元ニオカサリシ物大西
部隊ノ市街焼討戦術ノ為信長ヲ納新ノ放
火セラレ松高ニ裝備スルヲ得ズ 無傷ニシテ引揚グ
大津隊

松高ハ海中ニ投棄

「ボゴ」ノ内ニ在リテ陸軍部隊ノ榑橋トニアリテ之ニ敵上陸
ト告メ命ヲ下シテ破壊引揚グチリ

D. 中隊航空隊

隊ノ埋没其飛行場及隊門附近陸地前ノ地帯ニ
位置ヲ裝備觸発又ハ管制装置トナシ陸地ニ就テ

E. 其他

担当地域ノ地帯(主トシテ爆発)ヲ觸発トナス。

第一大隊ノ中隊ノ地帯ハコソクシメテ陸軍部
隊引拂ノ陸道ニ迷ヒラ地帯地区ニテ爆発セシモノ

アリ

(5) 敵ノ一部ハコソクシメテ陸地ニテ抵抗ヲ受ケテシテトクシメ

(6) 敵ノ大部ハコソクシメテ陸地ニテ抵抗ヲ受ケテシテトクシメ

ノ爆発セルモノヲ見ズ

- (7) 敵ハ砲射撃並飛行機後援ノ下ニ上陸セルヲ以テ、リサイ地区防衛担当ノ備口部隊ハ海山行ニ於ケル抵抗ヲオシ得ズ引退スリ
- (8) 敵ハリサイ地区ニ増強係ヲ確係、爾後附近一帯ニ戦果ヲ擴大スルト共ニ主力ヲ以テ北進ス、第10日、米比軍其誘導ヲナシ、飛機場ヲ占領ス
- (9) 米比軍其誘導ヲナシ、飛機場ヲ占領ス
- (10) 敵ノ北進ニ対シテハ地区担当ノ服部大西兩部隊共強ニ抵抗ヲ行ハズ、街地ニ於テ新込ノ外耳ニモズ
- (11) 兵ヶ江市南西端市政庁前表山ニ於テハ大西部隊、一テ小隊強ニ抵抗、反撃シテ其遺半數ヲ殲セリ
- (12) 敵上陸者夜ヲ獲テ七名以上十五名以内ノ一組トスル新込隊

128

六 異陣地戦

の初期(自敵上陸至四月初頃)

三月二十六日敵ハクワリサイニ上陸シ海岸道沿ヒ北進シ米ハ我海軍新込隊ハ先ヅクキヤ南敷外ニ花ヲ敵ニ合シ第一回新込ヲ大破スルニ見込キ我軍ヲ是手バルニ至ラズ

ヲ各大隊約十員ヲ組連日派遣セリ
各組勇戦セル模様ニシテ憤ラザル有ト敵ノ意ニ戒網嚴重直
土人ノ敵ニ通謀スル者アリテ戦果割合ニアガラズ
未帰還連日數名ヲ出ス

1120

(2) 二十七日、セブシ市南軍に敵侵入我新込隊に陸軍ト告
 市内ニ突入新込ヲ実施セリ

(3) 敵ハ大シク痛痒ヲ感セズ弟三ヨリ六、海岸ノ二條
 ノ道跡ヲ戦車ヲ先頭ニ北進シ飛行場南部ニ進出
 野砲連隊砲四十數門ヲ搬入海軍降地南東部
 約三ヶ所ニ進ノ戦車十五輛ヲ下ラセ (艦艇協力)

(4) 第四日(二十七日)ヨリ敵ハ海軍降地ヲ車輪的ニ砲撃開
 始シ(敵機)終日上空ニ在リテ各機ヨリ約六十個ノ爆弾ヲ
 塵取リ塵芥ヲ投下シ如ク投下シ我降地ハ第三大
 隊降地次デ本降地第一大隊降地ト次々ニ爆弾ノ沈没
 ヲ受ケ概シ焼野原ト化ス (飛行場西方約四ヶ所)

(5) 第四日(二十六日)大西部隊終ニ我降地(道路南側)ハ占領セ
 且既ニ敵ノ観測機ヲシテ見升天ヲ命見ニ

124

(隊内)

- (6) 第一大隊ハ「ト一カ」或ハ飛行抑倒機孔陣地ニ籠りノ
 砲撃ニ抵抗スルモ、敵ハ戦車ヲ「ト一カ」前面ニ走ラシメ
 五輛立テテ、銃眼孔ヲ徹底的ニ破壊シテ、後面出入口
 ヲ閉塞スルヲ以テ、煙夷戦術ヲ出ヅリ、
 我方將時致宜シト見テ、地雷爆破破ヲ「ト一カ」ニ既ニ敵ノ
 用塞トシ、或ニテ牽引車ヲ斬断セシメリ。 故銃ヲ以テ
 射撃スルニ、戦車ヲ射スルニ、射撃スルニ、射撃スルニ、
 二砲撃ヲ以テ夜間銃眼孔ヲ修復スルニ、敵ノ志願ヲ覆フ
 ことニ、此ニ共敵ノ前進ヲ牽制スルニトテ、抑テ大ナリ
- (7) 斯レテ砲撃ニ終ニ三日ヲ係トシ、其間ノ反撃ニ大ニテ
 効ヲ奏スルニトシ、
 後方ヲ遮断セラルル、
 主陣地附近岩間ニ隠蔽設置セシ、
 好機ヲ捕ヘテ飛行揚ニ対シ、
 砲撃ヲ試ムルニ、
 黒色火炎ヲ
- (8) 主陣地附近岩間ニ隠蔽設置セシ、
 好機ヲ捕ヘテ飛行揚ニ対シ、
 砲撃ヲ試ムルニ、
 黒色火炎ヲ

二濕氣ヲ帯ビテ彈有極ノテ不良 漸クニ々位々進出シ

第ニ敵歩兵ノ密集部近傍ニ彈有ルニモ 彈有極等

不可能ノ為戦果ヲ得ルニ至ラズ 只使倅ヲ以テ

飛行場兩端ニ在ル戦車ニ輜ヲ射レ直撃彈ヲ得テ

飛ビシノタルニ止マレリ 日ノ丸山ヲ登ルニ兵徒ニ切齒拒敵スルニ

(8) 然レモ敵ノ猛攻ニ拘ラズ第ニ大隊ノトキカ貼付我衝ノ

有敵ノ進攻仲々揚ラズ 敵ハ先ヅ大西部隊降地

ニ助攻ヲ行ヒ之ヲ啗テ進ミテ 第ニ大隊南東端

降地ヲ夾撃シ兵士ヲ全圖ス

同地点ハ我降地ノ中核天山ニ通ルニ一ノ道跡口ナ

リ而シテ海軍降地ヲ得テ天山ニ通ラズ

圖ニ示シ以テノモノナリ 敵ノ企 猛攻ヲ

(9) 敵ノ猛攻旬日 第ニ大隊ハ強固ニ抵抗シテ未ダ首路口ヲ

拒シテ讓ス

依テ敵ハ其ノ西方(大西部隊側)ヨリ侵入ヲ企テ首踏

口西側隊門山(飯室隊門前)ニ牽ス

同地守備ノ任ニアリタル勇ニ大隊日笠中隊長ハ部下下士

を命ジ隊門山下楢孔ニ掩蔽シタル陸軍病院砲臺ニ

点火シテ敵ハ山下方面ハ一者ト共ニ敵ハ山上

ニ約楯右を怒リタルヲ見テ点火シ見奉ル爆破ノ目

的ヲ達シ自ラハ楢孔入口ニ在テ人事ノ不慮ニ陥リ

タリ(同ヲ救助セラル)

爆煙天ニ沖シ爆音天也ヲ震撼シ其壯觀言語ニ絶

皇隊門山ハ其七割ヲ失ヒ全軍ヲシテ心シ果敢ヲ

示セタリ

後我

日ノ丸山ヲ詮見スルニ敵ハ戦事ニ付トラスクニ付

破壊、北佈者、柵、多敷ニテ、病院車十台ヲ
連ネテ、三日ニ亘リ、軍、撤セリ

(10) 飛行場ニ敷設セ、地雷約五十個、隊門山西方(大西部隊トノ間)ニ
敷設セ、地雷約三十個ニ及ブ、敵ノ崩落ニ致シ、敵ハ戦車
前ニ柵、柵ノ如キ磁石ヲ持テタル歩兵、其ノ戒シマアリ、ヨリ爆発
スルモノヲ認メズ

(11) 陸軍部隊方面ノ戦況ハ、海軍降地ヲ視認シ、柵ト大
西部隊乗倒ノ戦況ト新込隊ヨリ情状報告ニヨリ、
外特、固司、令部ニ連絡シ、モ不明ナリ

(12) 敵ハ上陸スル、約一週、同ヲ経テ、市政府前ノ道路ニ
視測機ヲ有セシメ、アルヲ認ム

(13) 有月相、飛機ヲマシ、タシ、島、飛行場ニ、三、月、末、ヨリ
次、弟、ノ、飛行機ノ、飛着、局、松、繁、トナリ、日、九、山、前、而

復
目
省

撃込生ズレハ砲煙の彈ヲ投下シテ目標トシ之ニ對シ射
 撃ヲ集ルルニシテ、砲聲又是亦不空砲煙彈ナリ其兩者
 互ニ色ヲ異ルル異色ノ空煙彈ヲ以テ射撃シ視察後
 三ツ竹云ニテ砲聲ヲ集中ス、 砲聲ヲ正確
 ナリ 砲聲ニ彈着物ヲ正確我ト今多雲泥ノ
 相違アリ 根柢不佐ノ言ニシテ敵ハ無煙火藥ヲ使用
 シアリト

(16) 敵ノ戦闘態ヲ見ルニ在リ如シ 之ヲ逆用セシ初敵ノ

攻撃ハ進歩セザリキ

A. 午前七時頃出動八時頃戦場着九時頃より

攻撃開始

B. 攻撃ハ常に戦車ヲ先頭トシ随伴歩兵ノ地

雷装成アリ 地雷ヲ発見セバ奔趨ヲ擲テ之ヲ

復員省

詳ケレム

C. 敵ヲ見ルニ徹底的ニ戦事記シ以テ記事ナス

D. トリケカニ付シテハ正面ヨリ戦事ヲ以テ記事ヲ沈黙

セシテ後進出入口ヨリ焼夷戦術ニ出ズ 此ノ後

ヲ先セズ反撃ヲ要ス 然レトキハ概不詳ナリ

詳述シ得 兼テ戦術ノ新リキルヲ示シテ聞カス

E. 午後四時頃攻撃ヲ止メ五時頃戦地離脱帰

ルニ

F. 記事ハ往同交代ニ行ケルノ如ク午前一時頃

迄十五分間隔 以後三十分乃至一時間間隔

ニシテ書同送定セシ目標ニ対シ行ケルノ如ク

目標ノ存否ニ関セズ有打ナリ或ハ寧ロ空射ト認メテ

G. 夜間ハ周囲ノ望或ハ標ヲ示シテ敵軍ニシテ侵入ニ難

194
0585

0719

古毛 島にスニアリテハ 我輩ヲ解キ 飲酒ニ談笑シ

燃火ノ發制等今ノ行ハズ 無恐ナリ

H. 我輩ノ島居ニテキリ 悔ミ 橋ノ戦場ニ在リ

ル處ニ天幕ヲ張リ 指揮ヲ觀測シ 休憩シ

テキリ 将校ノ姿望遠鏡ニテ 明瞭ニ視認

シ得

(1) 敵情ハ 地ヲ占リ 以テ 一度 我軍ヲ突破シ 得ル

テハ 新込ハ 割合ニ 容易ニ 敵ノ 混雑ヲ 喫ハ

名状ス 可ク 誠ニ 笑止 千 萬ナリ

復員省

(4) 中期 (四月下旬)

(1) 隣接を大西部隊降地ハ其道半ヲ侵略セラル

(2) 其南方服部部隊降地ニ着テ侵略セラルルヲ認ム

(3) 海軍降地ハ攻撃正面上ニ拘ラズ柳ヲ堅牢ニシテ守ル

トシテ進マズ 根拠部隊長ハ部隊ヲ叱咤激勵シ部隊亦

降地ヲ死守シテ動かス

(4) 然レ共其巷ノ大差ハ如何トモ有ラズ四月下旬末ニ至リテハ

遂ニ約シ弟ニ大隊降地ノ約四分一ヲ呑食セラルニ至ル

其間前日敵侵入セシ地域ニ掃地雷四個ヲ設置シテ

隠匿放設シ義軍出現ノ際ニ五枚投銃或ハ迫撃砲

ヲ急射シテ敵ヲ驚カシ慌テテ解退スル際掃地雷

解レテ觸発スルニ四台或ハ空リ来ん敵歩兵ヲ反撃シ

テ解退スルヲ一途ニ激戦ヲ繰返シラハアリ

小隊期(中)中

の戦間部隊は充分漸く息跡ヲ来ス折板敵ハ更ニ爆
 撃砲撃ヲ強化シ 日海軍本陣地日ノ丸山ハ大型
 爆弾ノ沈没ヲ多ク 連発砲台ニ修繕ヲ大ニナリ
 (8) 頂上見張所附近及南側司令部附近ハ全ク樹木
 ハ吹飛ばシ草一草ナク至ル

田

(6) 情況如ノ如ク兵居ノ大層ニ毛杓ヲ及テテ敵陣内ニリ
 ルニ戦況我ニ好轉スルコトナリ以テ戦間部隊ノ伸
 縮ハ次第ニ息跡を分ク場ス
 根拠部隊長キ常事ナリカキ集ルルニ至ル

(1) 後期(四月中旬)

(中期後半より)

(1) 敵先鋒は多謀の前線戦闘指導者として概不支村部隊を

押し指押す事あり

(2) 四月廿日敵ハ突如トシテ海岸降地北部(境田穴代相寄地)

ノ未定戦士ニ乘ジ戦車一両ヨリ戦先頭ニ攻撃シ米リ

突撃ニシテ最後方中隊ヲ仰降地前面ニ殺倒セリ

中隊長ハ敵陣内ニ奮戦シテ戦死 境田穴代ハ同降地ニ閉込メ

ブルニシテ

(3) 其報信令ヨリ支村部隊長ノ許ニ米利トシテ午後一時直ニ

日ノ丸山北側ニ降地ニ向合セシムルニ同方面ハ断崖ニテ安全ナ

ク有聖ニ成リ急クシテ 部隊長ノ向合セヨリ米利トシテ戦死

攻撃開始セリ

敵ハ折角ノ主降地ヨリ丸山ノ標旗近ク進出セシメ

勇三十三耗二十五耗敵銃ノ集中攻撃ニ著シク兵力ヲ消耗

(5) 此兵大ノ陣地ヲ中隊ナシトシテハ日ノ丸山後方ニ出極メテ
 島ノ片我海軍陣地ニ直ニ危險ニ瀕スルニ至ルノ死命ヲ制スルニ危
 (6) 依テ直ニ施設工外隊ヲシテ之ニ対セシメテ 吉村部隊ノ豫
 備隊半數ヲ司令部隊備隊トシテ之ニ次ニ施設工外隊ニ
 代ラシメテ 施設工外隊ハ協力隊トシテシム
 士久木ノヲ旺盛ニ投身攻撃志ヲ示シテ有認出ノ有極ナリ
 (7) 吉村部隊ヲ刻ニ至リ境田少佐陣地ニ進出シテ利便ニ至リ
 レテ吉村部隊豫備隊ノ強部約一ヶ中隊ヲ與ヘ同夜
 夜襲快行ノ陣地全部ノ奪回ヲ命ズ
 境田少佐陣地ニ一隊出テリ部隊ヲ区別シテ夜襲快行
 シテモ不事最前線陣地ニ達セントモ時勢不明助
 戦事古口ニ進ハレテ死傷脱出夜襲失敗ノ帰ス

第二復員省

(9) ~~敵~~ 敵の舟に侵入し来り戦車は同降地より高松村
 部隊第二中隊(高松隊)降地より北方より側面攻撃す
 討撃力ヲ示シ 歩兵は夜明け部隊降地ニ散る隊ノ構
 築ヲ開始スルニ至ル
 (10) ~~敵~~ 高松部隊の對し夜明け攻撃す
 隊の兵力に對敵前線各壕構築ニ着手す
 (11) ~~敵~~ 夜間修理す
 (12) ~~敵~~ 夜間修理す

第二復員省

(12) ~~(11)~~ 夜間敵軍の途中に追放退す。之に對して新込隊多數

(施設工外隊多數、軍需部兵若干名) 夜明けに

陣地を疎るゝ歩兵部隊に對しては松籠(橋本)兵隊に攻撃

を次ぐ。夜明けに陣地を以て敵軍の再侵入を遂に阻止

し得ず。放棄を遂行し陣地を明けし來る。境田部隊陣地

を三回にわたる。 11月12日 我々の傷兵又之を重傷し12日決す。

(13) ~~(12)~~ 陸軍陣地を攻るハ大西部隊陣地ハ其大半ヲ失ヒ、腹

部ハ隊陣地ハ~~谷間~~谷間ヲ戦車ニ突破せし敵

軍最深部ニ達シ陣地ヲ見す

(中国命令ニ依り)

(14) 11月13日北方谷子部隊陣地ノ配備ヲ変更セリ。

其村勢ハ飛行場北方地迄進出敵ヲ北方ヨリ圧スルガ

如申シ 高塚ニ在ル境田部隊陣地ニ對シテ陣張策ト了解

第二復員省

151

○翌十四日薩州其隊參謀ヲシテ師團司令官部ノ企圖
ヲ偵見シ當方ノ要求ヲササレシム

(15) 然ニ股部ノ隊ハ其日既ニ擊突破セシメテ敵ハ

師團司令官部ニ後方ニ出現攻撃ヲ準備シテアリ

トノ情報ニ據テ後方ヲ防禦シテ中ナリ

同七時頃ニ降地ヲ放棄シ北方轉進ニ決シ、十六日午後

七時轉進開始ヲ命ズル也

薩州其隊參謀在司令官ヲ復讐シテ歸有セルハ十五日午

前四時ナリ

(16) 在司令官ニ其軍中悔軍ニ於テハたニ決シ

A. 收容部隊 境田部隊 及佐野隊 註十二種砲一門

B. 前衛 志村部隊 本隊司令官部 施設工外隊 津路隊

後衛 長束部隊

C 收容部隊 撤退 十七日正午以後

第二復員省

(17) 先任参謀ハ師團長ノ稱ヨリ十五日午前五時司令部
 奉召返正子以師團司令部着簡子ハ其時
 後翌午前一時師團司令部奉召午前五時海軍
 十六日

司馬部ノ帰着セリ

(18) 其間各師團長ヲ集合司令部令下達アリ此ハ根
 東部隊長ハ例ニヨリ例ノ如ク執拗ニ理合度ヲ不
 考知リヌホシ

前衛ヲ全張シテ總計ニシテ
 司令官モ持テ歸シテ前後衛ヲ入替エテ敵ニ接
 シテ根東部隊長ヲ先ヅ引揚ゲシムル時陸軍別
 無視ノ方策ヲ敢ヘテ取ルルニ至リタリ

先任参謀歸着後ニテハ時既ニ遅ク又妙妙ト云

招致

第二復員省

十ニリ得ズ

(19) 通信ハ直線ノ確信ハ度々ノ爆撃ノ拘束制線

空中線ニ被突アリタルニ概テ各部ト連続シ保持シ

アリ。此レ共、戦況進行ニ伴ヒ波長部揺レ為対午

ニ於テ受信状態良好ナラス GK 通信系ハゴバオトノ

ニ受信シ 詳細ハ次以後

当隊ヲ相午ニミズル為メ山崎少佐等ハ同隊ニ出立

テ山崎少佐トトモニ降参シ拘束 依テ北方転進ハ十六日

早朝ヨリ午後四時迄連続送信セルモ GK ノ受信セル

事トナラス 其後送信ヲ打切ルノ已マリ得

ルニ至ル

(20) 前後斜及部隊毎ニ十五日ヨリ転進ニ対スル為 総偵察ヲ実施

第三復員省

セリ

(21) 派遺中ノ新込隊ハ松浦命全突起ナリシ為連続ノ方法

ナリ。師団司令部長ノ解部書ニ由リ何トカレテ事情次第ヲ判断

シテ帰隊ストノ義ニ依存スルノ外ナカリキ

(經驗談)

(22) 十二程解部高角記ニ于テ松枝銃ニ係リテ破壊シテ除却ハ

松石ニ松納ノ儘孔口ヲ爆破。糧食其他古器類ニ係リ

シテ得ヤシニハ亦同様ノ処分ヲナリ